

中国書道史を基にした現代書道

岡 藤 淳之輔

中国 年 表 日本

殷 周 秦 前漢	新	後漢
<div> <div>○</div> <div> 甲骨文 金文・大篆・石鼓文 小篆・秦の始皇帝 古隸 </div> </div>	<div> <div>○</div> <div> 八分 ガンダーラ彫刻 </div> </div>	<div> <div>○○</div> <div> 札器碑 衡方碑 </div> </div>
	57 弥生期	
	光武帝から金印を受ける	

中国書道史を基にした現代書道

八〇〇	七〇〇	六〇〇	五〇〇	四〇〇	三〇〇	二〇〇
唐	隋	南	420	朝	西晉	三國
		536	北魏	東晉		
懷素	顏真卿	孫過庭	褚遂良	虞世南	歐陽詢	太宗
李白			杜甫	鄭道昭		
			王羲之（樂毅論）			曹全碑
			王獻之			張遷碑
						鐘繇

八〇〇	七〇〇	六〇〇	五〇〇	四〇〇	三〇〇	二〇〇
794	710	645	552	430		
奈良 天平	白鳳	飛鳥	大和	古墳期		
嵯峨天皇 空海	光明皇后 鑑真 多胡碑	聖德太子 法華義疏 宇治橋碑	稻荷山古墳出土鉄劍銘	江古田古墳の太刀	大和政權の成立	

王羲之風 流行	初唐風 流行	六朝風 流行	
------------	-----------	-----------	--

九〇〇	五代	淳化閣帖 王著	一〇〇〇	北宋	蔡襄 蘇軾 米芾 黃庭堅 徽宗	一一〇〇	南宋	張即之 蘭溪道隆 無準師範 園悟克勤 禪林の書	一二〇〇	元	趙子昂 鮮于樞 中峯明本	一三〇〇
-----	----	---------	------	----	-----------------------------	------	----	-------------------------------------	------	---	--------------------	------

九〇〇	橘逸勢	菅原道真 紀貫之古今集	一〇〇〇	平安	小野道風 藤原佐理 藤原行成・藤原公任 藤原定信	一一〇〇	鎌倉	藤原定家 元の来襲 一山一寧帰化 尊円親王	一三〇〇	南北朝
-----	-----	----------------	------	----	-----------------------------------	------	----	--------------------------------	------	-----

中国の書が日本化された時代 和様が盛んであった時代	禅宗様が盛んであ った時代
------------------------------	------------------

	一四〇〇	一五〇〇	一六〇〇	一七〇〇	一八〇〇	一九〇〇
絶海中津 祝允明 文徽明	明	清	中華 民國			
	董其昌 張瑞図	王鐸 傅山 八大山人 金冬心 鄧石如 何子貞 趙子謙	吳昌碩 魯迅			
		日清戦争				
	室町	江戸	明治 大正 昭和	安土・桃山	1867	
一休宗純 応仁の乱	近衛信尹 本阿弥光悦 松花堂昭乗 即非・独立・隠元・木庵 池大雅 良寛 貫名菰翁		大口周魚 副島蒼海 中林格竹・西川春洞 日比野五鳳・西川寧			
和様が衰え、五山様 が盛んであつた時代	かな復興	唐様が盛んであつた 時代	中国風が盛んに なつた時代			

目次

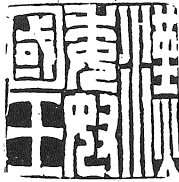
歴史以前の時代	一三〇
飛鳥時代六朝風の流行	一三三
白鳳時代	一三五
奈良時代	一三六
弘仁時代	一四〇
藤原時代	一四三
平源時代	二四七
鎌倉時代	二四八
南北朝時代	一五一
桃山時代	一五三
江戸時代	一五三
近代	一五七
結論	一六一

大昔のわが国には文字がなかった。だから話はできても、手紙を書いたり、メモをとったりすることはできなかった。そんな不便な状態のところに、中国から文字が入ってきた。漢字である。そして後に、この漢字がかなの原料になった。

では、いったいいつ、かなの原料（漢字）が入ってきたか、最も早く入ってきたことを示す証拠の品は、江戸時代の天明四年（一七八四）甚兵衛という百姓が、博多の志賀島の水田で見つけた金印である。この金印には篆書で「漢倭奴国王」と三行に刻^はられているが、多くの学者が調査の結果、中国の後漢の時代（二五～二二〇）のことを記録した「後漢書」という本に「建武中元二年（中国の年号で西暦五七年）日本の奴国^{なごくに}から来た使者に、光武帝が印をプレゼントした」と書いてある印そのものだということがわかった。それで国宝に指定され、現在福岡市博物館に大切に保管、展示されている。この金印によって、中国という大きな国の皇帝から「日本の奴国の王様である」という証明をもらったことになる。

甚兵衛の大発見のおかげで二〇〇〇年近く前の一世紀に、わが国に漢字が入ってきたことがわかる。

これによっても、わが国ははやく中国との直接に交通の道が開けていたのであり、したがってその文化の影響をうけてい



たことは、容易に察せられることである。ところで文献の上においては、その後は晋書、宋書および南齊書などにのせられているが、当時の遺物としては、きわめて乏しいことであるか、金文きんぶん一文は文字の意味、古代の鉄器や銅器など金属類にしろされた文字、文章、古銅器の銘文など二種が伝わっている。

一つは熊本県玉名郡菊水町江田船山古墳（家形の石棺を主体とする前方後円墳）から出土したものである。鉄製で、刀の背に銀の象嵌やうかん（金属、木材などの面に模様を金銀などではめこんだ細工）で文字が刻きざまれている。字数は七十五字ある。書者張安とあるから帰化人であろうと思われる。趣意は、この刀を帯びるものは、子孫に至るまで祝福されるであろう、というのである。漢字はすでに金印にも見られるが、この刀銘は、日本における漢字使用の最古の遺品とされている。

二つには和歌山県橋本市の隅田八幡すだの蔵する人物画のある鏡の銘文である。その鑄文によると、癸未みづのとひつじの八月十六日に、王年口弟王おしが意紫沙おしさ加宮かみすなわち忍坂、押坂にあったとき斯麻念長しまが命をうけて、開中かわちのあた費直えひとと穢人えびと今州利との二人に、白上銅二百桿かんを材料として、この鏡を作らせた、とあるから、わが国人の手によって、漢鏡にまねて作らせた、という意味である。この鏡は径十六センチ、十個の人物をえがき、その周囲には銘文がめぐらされている、時代は六世紀始めとされている。「おしさか」という国語「やまことば」を表記するのに漢字の表音的転用がなされている漢字で国語を表記した古いもの

江田船山古墳
大刀銘



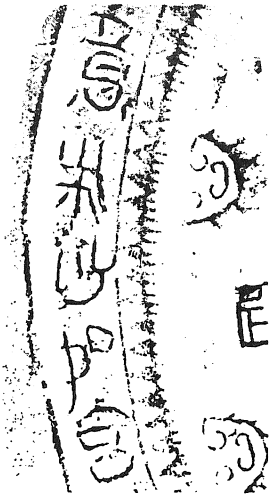
で、かな沿革史のうえからも貴重な資料である。

あたかも中国にあつては、六朝時代ろくちようの梁の武帝のころで、王逸少いつしやう（羲之ぎし）三二一―三七九）の没後すでに百年余をへている時にあたるから、わが国の通用文字が残っていないのは残念である。この二つの銘文はともに、先に述べたように、漢字をかりてきて、国語を表記していることは、国語史のうえでは、仮名発生について最も重要な問題とふくんでいるし、わが工芸発達の上からも大いに使用すべきものがあるとおもわれる。

漢字伝来の当初はもちろん、その後も長く中国の書の模倣が行われ、さらにわが国独特の書風が生まれても、やはり絶えず中国の書の影響を受けた。現在も中国の書の影響はつづいている。いいかえると、わが国の書は常に中国の書の影響を受けながら発達し、変遷したのであって、両国間の書は密接に結びついているといわれる。

中国は国土が広くて人口の多い大国でありその上、過去においては、文化の発達した先進国であつた。それにひきかえ、日本は、国土が狭くて人口の少ない小国であり、古くは文化の発達もおくれた後進国であつた。そこで、中国を尊重し、中国の文化を摂取することに努めた。万事中国を規範としたから、書においてもすぐれた中国の書が規範となつたことはいう

隅田八幡宮
鏡銘



銘鏡像人物人

までもない。中国は文字の国といわれるように文字を大事にした。従って書を尊重した。しかも書の歴史は古くて長い。日本の書が常に中国の影響を受けたのは自然の成り行きと思われる。

飛鳥時代六朝風の流行

その最初からそうであったことを物語るのが聖徳太子（五七四～六二二）のご自筆による法華義疏である。太子の四十二歳にあたる御筆跡といわれている。大部分は行書体をもって書かれ、その間にあるいは楷書に、あるいは草書をまじえて書いている。法華經の注釈書の草稿本で四巻から成り現存する。我が国最古の肉筆資料として極めて貴重なものである。その背の低い丸味のある書きぶりには、中国、六朝風を感じさせるものがある。

法華義疏の開巻の下部に書いてある「此是大委国上宮王私集非海彼本」（此れは是れ大委国上宮の王の私の集なり、海の彼の本に非ず）の書風と、夫妙法蓮……の書風は少し違うように思われるが。聖徳太子の時代は、中国では隋の時代である。しかし「法華義疏」や当時の金石文の書風は隋の書風ではなく、それ以前の六朝時代の書風である。六朝時代の書風が中国

法華
義疏

壽轉成長遂に神藥若論迦釋如未應須氏長に大意石
時歎宣讀氏徒教循同歸之妙同合得莫こも大果任衆主
宿須善微科而能能五濁都於大獄六弊獲思慈服華不
下同衆同果も大理所如未隨時而宜初就廣範而三衆
の別派使感各趣に追果從氏未難後平説元初勸同悟或

鍾繇にヒントを法
華義疏はうけたの
ではないか

鍾繇『薦季直表』



宇治橋
断碑



←中国・北魏時代の「張猛竜碑」の
字とよく似ている。



から朝鮮を経て、日本に伝えられた。あるいは中国から直接伝わったものもある。「最も古い石碑」「宇治橋断碑」宇治の平等院から向かう岸に放生院・通称橋寺つうしょうはしでらという寺があり、その境内に、わが国で最も古いとされている「宇治橋断碑」がある。大化二年（六四六年）中国では唐の時代。国語交じりの漢文で書かれているため古代国語の表記法の手掛りとしても貴重な資料である。その書体は六朝風の楷書で、運筆に速さがみられ重々しい筆致で表記されている。いつの間にか失われた碑が、寛政元年（一七八九年）に、全碑のおよそ三分の一の上部が発掘され、後に補修したので断碑だんぴと称している。当時のわが国ではまだ古い六朝風が流行していた。

白鳳時代 初唐風流行

天武天皇十四年に河内国（大阪府）で「金剛場陀羅尼經」こんごうじょうだらにきょうが書写された。その書風は唐の欧陽詢風で（初唐の三大家の一人）六六三年に建てられた欧陽通の「道因法師」の書風と同じようである。河内国にも欧陽詢風の書を書くものがいて、

法時又殊師利童子及諸大菩薩衆及諸賢
聞衆天龍夜叉乾闥婆阿脩羅迦樓羅緊密
羅摩睺羅伽人非人等聞佛所說頂禮佛足
歡喜奉行

金剛場陀羅尼經
は欧陽通の書風
と同じではない
か



唐・欧陽通書
道因法師碑

当時欧陽詢風が愛好され流行していたことを示しているといつてもよい。

群馬県吉井町に「多胡碑」^{たこのひ}といわれている古い石碑がある。内容は、和銅四年（七一〇）（奈良時代の初め）多胡郡ができたいきさつが述べられており、したがって「多胡郡碑」ともいわれている。規模が極めておおきく、堂々たる書風は鄭道昭（北魏時代）の書をおわせるところがある。筆者のスケールの大きさがうかがえる。

なお群馬県には、もう二つの古い碑「山ノ上碑」と「金井沢碑」とがあり、三つを上野三碑^{こうげさんび}または上州三碑という。

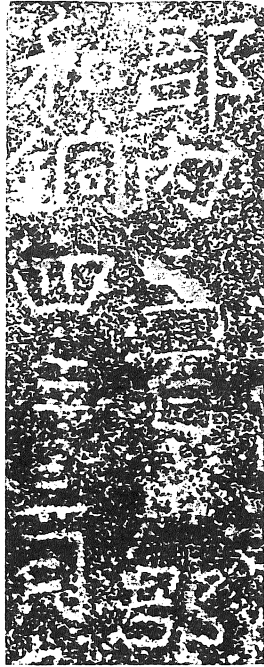
奈良時代（^{しんとう}晋唐風の流行）

和銅三年（七一〇）に郡は藤原京から平城京に移された。奈良時代には貴族階級は富み、栄え、文化が発達して、美術・工芸がさかになり、また、詩文・和歌がさかになって書もさかになった。

養老元年（七一七）に遣唐使が派遣された。一行は五百五十七人で四隻の船に分乗して、入唐した。遣唐使の一行の人数の多いことは、当時、唐の文化がいかに尊重されていたかといことがよくわかる。遣唐使・留学生・留学僧によって当時の唐の書風が伝えられて、唐の書風が流行した。

和銅五年に「古事記」が撰進^{せんしん}され、養老四年に日本書記が撰進された。また和銅六年に「風土記」の撰進を命ぜられた。国史・地誌が撰進されたことは漢字の使用に習熟していたことを示している。同時に書が盛んになっていたことを示している。

多胡碑

中国・北魏の
鄭道昭の字

奈良時代にできた「万葉集」を見ると、義之とか大王とか書いて「てし」と読ませ、全く別のことばの表意文字として使っているのがある。

万葉集の歌の中から

葦根之 あしのね 懃念而 ねまころおもひて 結義之 むすびてし 玉緒云者 たまの緒といはば 人将解八方 ひととよめやも

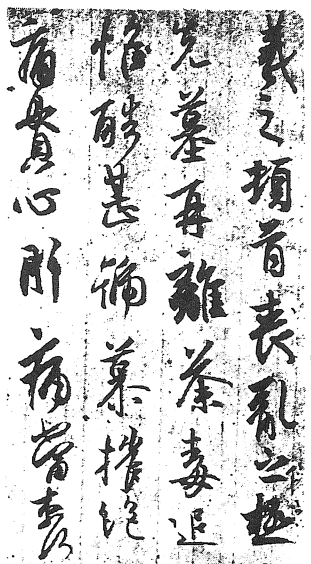
葦の根の ねまころ 思ひて むすびてし 結びてし たまの緒といはば 玉の緒といはば ひととよめやも 人解かめやも

(葦の根の) 心をこめて 結んでおゝた 玉の緒ならば 人が解くことがあろうか

ここでいう義之や大王とは王義之のこと、手師^{てし}とは字のじょうずな人(能書家)の意で、王義之を大王、その子王献之を小王といい、この父子を二王という。すなわち、義之、大王、手師三つとも「てし」と読ませている。

王義之が手師としてもつと尊重されるのは、能書としてすぐれていて、中国で最もすぐれていたからでなく、その書風がわが国でもつとも好まれたからである。

聖武天皇ずしめう雑集、聖武天皇が崩御された四十九日の御忌に、光明皇后が先帝の冥福を祈って東大寺に献納されたものであ



王羲之筆 喪乱帖

王義之の喪乱帖

書簡文 草書に近い行書体

現在学習者も多い

皇室の御物となっている

る。本文と同筆の奥書から聖武天皇三十一歳の時の執筆とみられる。内容は中国の六朝・隋・唐の集中から、仏教に関する詩文百四十数首を抄録されたものである。詩文の中心には中国では失われてしまっているものもあるようで、中国文学史の研究資料としても貴重な価値をもっている。用筆、結体共に王羲之の樂毅論に通ずるものがある。このように仏教を信条した聖武天皇であつたから、その宸翰（天皇自筆）とされる古筆はすべて写経で大聖武がある。

中阿含經 ちゅうあこんきやう

奈良時代の写経の多くは、唐経を規範とし、読みやすい楷書体で美しく、誤字脱字のないことが特色として挙げられる。阿含とは本来「来ること」の意味。万法の帰するところという意味から、仏陀の説かれた聖教を指す言葉とな

った。特に一難宝郎いちなんほうろう（七二一―六五）は撰津百済の人。祖先は百済の帰化人である。二八年の長きにわたつて東大寺写経所

に写経生として出仕し、数多くの写経を書いた。その阿含経は厳格な校正を経て完成した仏教精神修養のテキストであつた。

樂毅論 がっきろん

東大寺献物帳に「樂毅論一養……右皇太右御書」とあるもので、宸翰しんかん雑集、杜家立成雜書要略などと共に東大寺

如是我聞一時佛在迦毗羅衛國
尼拘盧陀僧伽藍舍時諸釋觀
見世尊光明神變闡揚妙化甚

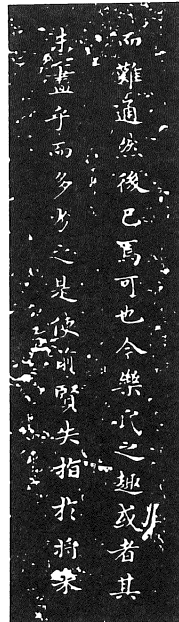
北魏造像記に似ている
賢愚經 字粒の大きさ

によつて中聖
武、小聖武と
よばれる。

に献納されたものの一つである。楽毅論は、王羲之が王家の家法を子孫に伝えるたろに、魏人の夏侯泰初の作った楽毅論（戦国時代の燕国の宰相である楽毅の人物論を書いたものである。）と同筆で書かれた奥書に「天平十六年十月三日 藤三娘」とあるところから、この書巻は光明皇后四十四歳の執筆と考えられる。行数も字数も王羲之の楽毅論と全く同じで、形臨意臨を兼ね備えた臨書の好手本である。

杜家立成雜書要略 光明皇后の書と伝えられ、今日、正倉院に保存する。これにも光明皇后の学ばれた王羲之の筆意がうかがわれた奈良時代の名跡の一つである。

奈良時代には隋・唐の写経を書写したので当時の写経の書風は隋経風あるいは唐経風である。



「楽毅論」

中阿含經卷第十 初一日誦
我聞如是 一時佛遊阿羅漢如來在細林中
令時世尊告諸比丘 手長者有八未曾有法
云何 為八 手長者有少欲 有信 有慈 有愧 有
精進 有念 有定 有慧 手長者有少欲者 此何

中阿含經

弘仁時代（晋唐風の日本化）

平安時代の初期百年ばかりの弘仁時代と中期・後期の藤原時代とは時代の様相がことなっているばかりでなく、書もこと

なっている弘仁時代の書は晋唐風であるが、藤原時代は和様（平安中期以後の中国書風と相対立する日本独自の書風全般を呼ぶ）である。そして藤原時代には中国風の書は一時すたれていたが、弘仁時代にはまだかなを美しく書くことができなかったが、藤原時代にはかなの書が完成された。

嵯峨天皇（七八六～八四二）は晋唐の書を愛好した。世を挙げて晋唐風に精進した。天平文化が聖武天皇を中心に発達した、この期の弘仁文化は、嵯峨天皇によって育成され進展した。晋唐の書に心酔した結果として、中国風の書を能くする者が輩出し、漢詩文の隆盛に伴い、書道はますます隆盛となった。天皇は詩人にして能書であつたから、詩人にして能書の空海と特別に交渉があつた。

そして嵯峨天皇は空海に書を書かしめられ空海は唐から持つて帰つた中国の名筆劇跡や詩文集を嵯峨天皇に献上した。それゆえ、嵯峨天皇の宸翰は空海の書の影響を受けることが少なくなかつたと考えられる。嵯峨天皇の宸翰は（光定戒牒）（弘仁十四年（八二三）天皇が三十八歳のときの宸翰で欧陽詢風であるが行書、草書の書は空海風である）である。

伊都内親王は桓武天皇の第八皇女、伊都内親王が、生母藤原平子の遺言によつて天長十年（八三三）九月二十一日、山階

而難通然後已焉可也今樂氏之趣或者其
未盡乎而多劣之是使前賢失指於將來

光明皇后が
書かれたもの



光明皇后の書かれた「東鑑論」
の末尾に書かれた皇后の署名。

寺（今の興福寺）に香灯読経料として墾田十六町余、畠一町を御寄進されたときの願文である。古来橘逸勢たちばなはやなりによるものと伝えられている。また逸勢は空海とのつながりもあった。行書と草書をまぜて、自由に速く書いている。用筆は巧妙にして点画は変化に富んでいる。それゆえ、三筆のひとりである逸勢はやなりの書といわれたのである。書風は唐風で、起筆に独特の癖が

竊に無明を戒先為炬滅
漫軌範本又為師所賦

嵯峨天皇が書かれた「光定戒牒」

五色
人

伝嵯峨天皇筆「李端詩集」より

鈴木翠軒臨「灌頂記」

実生
般若

現代作家

駒井茂静臨「灌頂記」

多羅空
般若

素之理將
披玉時之教
海不窮欣

伊都内親王願文

ある。末尾の「伊都」は伊都内親王の自筆である。なお、高校教科書に願文の作品が掲載されている。

空海〈七七四―八三五〉は如空・無空といったが、後、空海と改めた。年少から晋唐の書法を身に付けていた。在唐すること約二年、仏教を深く研究し、帰朝後は高野山に金剛峰寺こんごうぶつじを建立し、真言宗を広めた。日本の王羲之ともいふべき能書家として最も有名であり、また詩人としても優れていた。唐に留学中のノートともいふべき三十帖冊子は空海の書写といわれ、その一部は王法の書法であり、日常の書写体である。あるがままの書体であるが、草書の正体であり、そこに書の生まれ方の意義があるように思われる。日本の書道は後に和様に転じてゆくが、その根幹となるのは、草体であり、日本における草体の基本をここにみることが出来る。弘仁三、四年の風信帖は晋唐の伝統派の書法があり、かんしょうれきめい 淮頂かんしょうれきめい 曆名も同年の書であるが、重厚で力強く、顔真卿がんしんけい〈唐の四大家〉風が加味されて書風も一変する。

最澄は伝教大師ともいい、中国からわが国に天台宗を伝え、比叡山を開いた。書の上で空海と並び称されるが、書の上であまりに空海が光っているために、最澄のほうはその影がうすいようであるが、空海とはまた異なった意味でりつばな字を

弘仁三年十二月十四日於高野山寺受

胎藏灌頂人ノ曆名

都念二百廿五人

ミヤコ僧サハ沙弥廿七人
近江廿八人 香子廿五人

空海の臨書といわれる「書譜」(陽明文庫蔵)

乙未年七月廿八日
空海書
此は空海の臨書といわれる「書譜」の一部分である。乙未年七月廿八日、空海が書いたとされている。内容は、空海が在唐時代に学んだ晋唐の書法について、自分の経験と合わせて記述している。この書は、空海が在唐時代に学んだ晋唐の書法について、自分の経験と合わせて記述している。この書は、空海が在唐時代に学んだ晋唐の書法について、自分の経験と合わせて記述している。

書いた人である。その字は王羲之の「集字聖教序」の影響をうけている。

藤原時代〈和様の書の完成〉

和様は日本の様式である。中国の絵画を漢画・唐絵というのに対して、日本風の絵画を大和絵やまとえというのと同じである。建築にも唐様天竺様てんじくように対する和様がある。

和様の書は小野道風おののみちかぜ（八九四―九六六）が王羲之の字形を端正にし、点画を温雅にして創始したのである。道風の〈屏風土代〉や藤原行成（九七二―一〇二七）の白樂天詩巻などは和様の書の典型である。当時の漢字の書はたいはい行書体であり楷書は少ない。

延長五年（九二七）に興福寺の僧寛建かんけんが入唐した。この時道風の行書一卷、草書一卷を中国に流布せしめた。当時の中国は晩唐の時代で、詩も書も衰えていた。それゆえ、わが国のすぐれた詩とすぐれた書とを中国に誇示したのである。道風の

代土風屏筆道
齊春花
恩說林花霞
開晨興
青絲絲
陶門柳
白玉裝

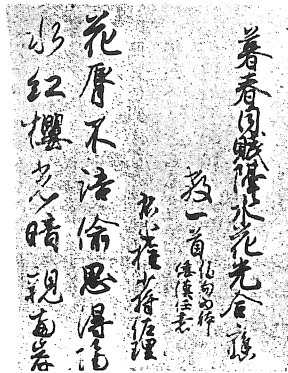
大阿闍梨所書五八詩卷中有
一百廿神似并方圓而并注義
筆澄澄
最澄筆
久隔帖
芳名今奉和符未知其礼

書は巧妙であるばかりでなく、その書風は中国で最も尊重する王羲之の書風である。それゆえ、中国人に賞揚されたことと考えられる。

長保五年（一〇〇三）に僧寂照（じやくしやう）（？—一〇三四）が入宋した、能書ではない。しかし宋人は寂照の書を賞揚したということである。寂照の書は和様で、王羲之風であったから賞揚されたのである。

道風以後の書はたいい道風の書の継承である。道風の書は和様の淵源であり規範である。それゆえ、後世長く尊重された。

藤原佐理（九四四—九九八）の書は漢詩の懷紙と消息五道（おんめいじよう）〈恩命帖〉、国申文帖（くにのもうしぶんじよう）、去夏帖（きょかじよう）、離洛帖（りらくじよう）、頭弁帖（とうべんじよう）とが残っている。字形は大体整っていて、点画は変化に富み、筆力がある。佐理は若年のころから書を巧みに書くことができた人である。消息（手紙文）は字形に拘ることなく奔放に書きながしている。そして筆力、筆勢があり、変化がある、そのうち太宰府に赴任する途中正暦二年（九九一）五月十九日に長門国（山口県）の赤間泊（下関市）で書いた離洛帖はもつと



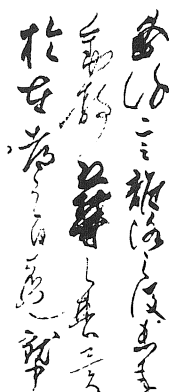
藤原佐理筆 詩懷紙

も傑出してゐる。

佐理の各作品に共通するのは、悠揚迫らぬ草書の連綿を駆使している点である。これを即、「張顛素狂」の影響を受けたとは断言できないが、狂草とも言ふべき、変転自在の筆致が認められることであろう。奔放さを遺憾なく發揮した中にも、書法の規矩をしかと踏まえている点は、素狂に相通じる。しかも、懷素自叙帖の揮毫が一気呵成であることについても同様である。

藤原明衡（？—一〇六六）の新猿楽記に、佐理の書の特徴を「一墨之様」といつている。一墨の様とは一息で書き流した筆致を思わせる。これは佐理が三筆や小野道風の能書から修得したというのではなく、当時交流のあつた中国（五代—宋）で人気を呼んだ「張顛素狂」あるいはその流派の自由な作家に著しく影響されたからではなかったか。もつとも、道風の影響が全くないとはいえないが。

行成は、手書きとしては、小野道風、藤原佐理と並んで、三跡に数えられた。真筆の遺品に、書状「白氏詩卷」「本能寺切」「白氏文集切」などがある。奈良朝以来の伝統的な王羲之書法と、私淑した小野道風の書法を根幹とした。優雅典麗な彼の新しい書は権跡（権大納言の筆跡の意味）と呼ばれ尊重され、その書風行成様は、以後、わが国の書道に最も大きな影



（佐理）謹言、離洛之後、未承
動靜、恐謫之甚、異
於在都之日、者也、就中

響を与えた。それまでの唐様の書に対し、日本風の書、すなわち和様の完成者として位置付けられる。

藤原時代（かなの書の完成）

この当時の女性性は漢字を勉強してはならないことになっていたが、和歌や手紙を書くにはどうしても字が必要であり、それらは国語そのものであったから表意文字がほしかったわけである。ところが、漢字を知らぬ当時の女性性は、万葉仮名を用いるにしても、本字になじむ必要がない。漢字そのものに関心や反省をもたない自由奔放にくずした字を書いたといわれる。このような伝来が、優雅な字体へ洗練を重ね、美しいひらがなを生み出したといわれる。このように女の世界で育てられたことから「女手^{おんなで}」などといわれるようになった。

集賢池茶侍中書
主人晚入皇城宿
何所須池月

藤原行成
白詩卷

に活判秘中

万葉抄作と云く、作者不明なり又之直書也

若せ依之太然る見あり物と云

藤原公任
北山抄

確かな考証からいうと、藤原公任（九六六―一〇四二）が書いた北山抄の草稿に使った紙の書いてある消息文（手紙）の字は、みごとに連綿体のひらがなである。なお、貫之がみずから書いたという「土佐日記」を臨書した藤原定家の字を見ても貫之の時代には、ひらがながかなり発達していたものと考えられる。

そんなわけで、ひらがなは空海がつくったという説は誤りである。もし、ひとりの人がつくったのならば、最初から一つの音には一つの字を作ったと思われる。ところが、ひらがなは一つの音にずいぶんたくさんさんの字がある。

平源時代（中国では南宋）

平源時代の漢字の書は藤原時代の漢字の書を継承して強さを加えた。藤原時代にはわが国と中国との公の交通はおこなわれなかったが、平清盛（一一一八―八一）は日宋貿易に熱心であって、書も宋風が好まれるようになった。

藤原頼長（一一二〇―一五六）は学問をもっとも尊重して、中国の経書・史書の読書に努めた人であるから宋風を書いた。

頼長の書は「因明論疏」の事実があるだけである。その書風は宋の蔡襄（一一〇二―一六七）の書風に似ているところが

土佐日記

紀貫之作

最初のかな

文日記

ふたつ、あまやふ日記といふ
さしむるにさしふみしうす
まやれぬのうへは教のそつ

ある。

鎌倉時代（中国では南宋・元）

栄西（一一四一～一二二五）鎌倉初期の禅僧日本臨済宗の開祖。二度にわたって入宋して、天台山の虚庵懷皦から臨済禅の印可を受けて帰朝した。その書は、北宋の能書黄山谷の影響が強く、和様書道に占められていた時代においてきわめて斬新な書風を示している。

俊苕（一一六六～一二二七）鎌倉初期の禅宗三十四歳のとき渡宋、十三年に及ぶ修行をおえ帰朝、栄西に迎えられ建仁寺に住した。

名筆家として知られ、宋の能書黄山谷の書風を流布した功績は、書道史上特筆される。

泉涌寺に自筆の「泉涌寺勸縁疏」付法状が現存、当時としては破格の、暢びやかな黄山谷流を伝えている。

道元（一一〇〇～一五三）日本曹洞宗の開祖。二十四歳のとき宋に渡る。天竜山の如浄のもとで悟りを開き、帰国、修行教化に励む。寛元元年（一二四三）越前へ招かれ永平寺を建立。「普勧坐禅儀」「正法眼藏」などを表わす。その哲学は難解

書風は董
庭堅に似
ている



宋西画像

夫以法之運獨不
通乎人之善識不

ながら武士層の信者を得て、日本思想史上最大の影響を及ぼす。元庵普寧（一一九七―一二七六）南宋時代の臨濟僧。四川の人、破庵派の巨匠無準師範の法嗣で象山雲巖寺、常州南禪寺に住した。文応元年（一二六〇）に来朝。博多崇福寺に止住したが、滞留六年にして宋国へと帰った。その書は柔和な姿の中に、鋭い感情を盛ったものである。

蘭溪道隆（一二二三―七八）南宋、鎌倉時代の臨濟宗高僧、四川の人、幼くして成都の大慈寺で得度。やがて禪に帰し無準師範に参じ法嗣となった。当時、求法のための入宋中の月翁智鏡の誘いをうけ寛元四年（一二四六）来朝した。博多円覚寺や京都泉涌寺に寓居、後建長寺に三住する。南宋の能書家張即之（一一八六―一二六三）の書法を最も早く我が国に伝えた。

無学祖元（一二二六―八六）南宋、鎌倉時代の高僧。無準師範に参じ、その法嗣となった一二七九年宋国が亡び、その年北条時宗の招請により来朝、蘭溪道隆のあと建長寺住持を継ぐ。上野国、長楽寺の一翁院豪に書いて与えた偈は、無学五十歳の書であるが、澄徹した悟道の上に立つて気魄に満ちた筆致は無学特有のものである。鎌倉時代の僧侶の書跡の中で、一頭地を抜いているといえる。

一山一寧（一二四七―一三二七）宋、台州の人。無学祖先の来朝より二〇年おくられて正安元年（一二九九）鎌倉中期、元の外交使節として来朝した。南禪寺の三世となる。この一山が南禪寺に入ってから、宋朝風の純粹な禪が京都において発展を遂げ、宋子学の移入など五山文学の上に重要な役割を果すこととなる。一山の教養はきわめて高度で洗練されたものであ

蘭溪道隆・金剛経を書いたもの

無学祖元

如是我聞一時佛錯拍注

中国書道史を基にした現代書道

つたから、その門人に与えた影響は絶大で、門下に夢窓疎石や虎関師鍊、雪村友梅などの代表的な五山僧を輩出した。
 一山が詩、草書に秀れていたことは当時より有名であつたが、ことに六祖偈（個人蔵）雪夜偈（建仁寺蔵）などその絶妙の程を示す名品である。一山は草書が得意で、唐末の懷素を学んだのではないかと思われる。
 宋人として蘇東坡、黄山谷などに似ていないのは珍しい。

いっさんいちねい
 一山一寧

懷素を学んだのではないかと思われる
 宋人として蘇東坡・黄山谷に似ていないのは珍しい

五山詩一首

虎関師鍊
 唐の文章家韓退之の名文
 「進学解」を書写した一部

相逢治具必張設
 去兜邪登崇俊良

虎関師鍊こかんしれん

(一二七八—一三四六) 京都の人。二一歳のとき元僧一山一寧が来日するとその門に投じ、深く傾倒し、その学芸をきわめて当時の第一人者となり、その後の五山文学の流行の先駆者となった。日本仏教史中の白眉といわれる「元亨釈書」をはじめ著書も多い。また遺書の中でも東福寺蔵の「進学解」はその学識と個性を伝える名品である。黄山谷を学んだといわれる。

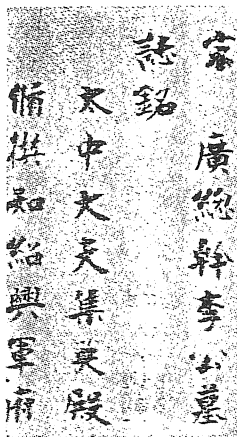
以上南宋の末期頃から元の時代にかけて、従来の書道史の中ではあまり大きな立場を持たず日本の文化史の中では、是また異常ともいえるほど重視されている書を省くことはできない。

かくて宋国との往来が頻繁となると共に、中国の文物が盛んに輸入された。これらの僧侶中、一山一寧のように筆札を工にするものも多かった。

この時代の書の、代表は蘇東坡、黄山谷・蔡襄・米芾の四大家であるといわれる。

南北朝時代(室町時代：明)

元弘三年に鎌倉幕府が壊滅して建武元年(一三三四)に新政がおこなわれた(南朝)しかし、建武三年に足利尊氏が叛し、



銘誌墓之筆即張
銘誌墓之筆即張

藏音初外通消息
藏樹華閣第一枝
天德長老理淳七姉
從幼出家管入
先國師南禪之室清
備萬寶行業精勤經

跡墨津中絶海

後醍醐天皇が大和国の吉野山へ遷幸されたので、新政は挫折した。それから元中九年明德三年（室町）までの約六十年の間、吉野の南朝と尊氏が擁立した北朝の対立抗争が続いた。

南北朝時代の禅僧は修行に努めたので、その書はすぐれている。京都五山の禅僧の書風を五山様という。当時の禅宗は宋の黄山谷、張即之、元の趙子昂などの書を尊重した。

絶海中津（二三三六―一四〇五）は、室町時代の臨済宗高僧、土佐に生まれる。十三歳で天龍寺に入り、夢窓疎石に近待。三三歳、明の建国時に中国へ渡る。在明十年にして帰朝、法兄春屋妙葩しゅんおくみょうはに招かれて天龍寺首座になった趙子昂風の書を能くした。

一休宗純 いっしゅうそうじゆん

（一二三九四―一四八二）も痛烈な書をのこした禅僧である。著書「狂雲集」のなかで、みずから竹を好み、竹筆を愛したというが、一休の書はその竹筆の性能と彼の気性がはげしくからみあって、きわめて存在をあきらかにするのである。一休は名利を求めず権力に媚びず、常に堂々と心境を披瀝したため一般からは奇行の僧とみなされていた。真珠庵の



一休宗純

諸悪莫作

諸悪莫作

衆善奉行

衆善奉行

「諸悪莫作、衆善奉行」の一行書きは代表的な遺書である。

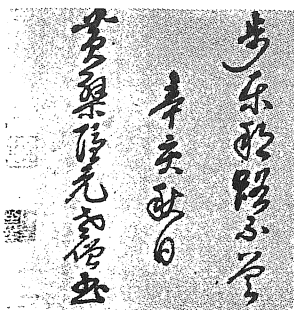
桃山時代（明）

桃山時代は上代様が復興された、当時は漢字よりもかなの書の方がさかんであり、すぐれていた。室町幕府が消滅すると、幕府の外護を受けていた京都五山は衰えた。それとともに五山文学も衰え、書も衰えた。桃山時代の五山僧の能書はまれである。そして、この時代は和様とかなの書とがさかで、中国風の書はしばらくの間振わなかった。

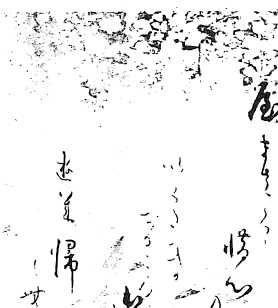
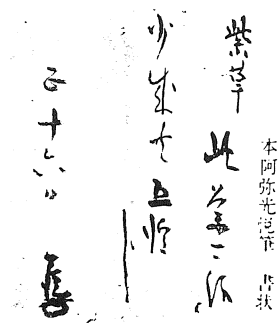
江戸時代（明末―清初）一六〇三―一八六八年（和様の普及・唐様の流行）

江戸時代の書は、このえのよた近衛信伊（一五六五―一六二四）本阿弥光悦（一五五八―一六三七）松花堂昭乗（一五八四―一六三

隠元書



本阿弥光悦筆 書状

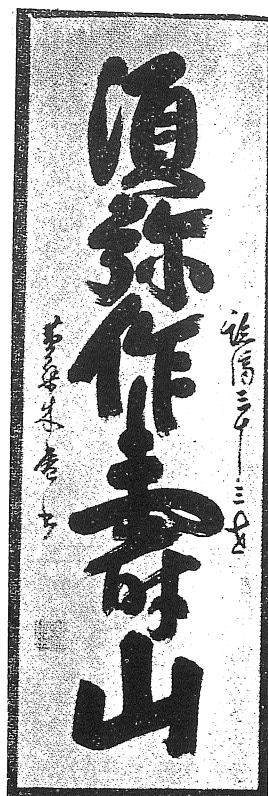


本阿弥光悦筆 金銀泥下絵和歌巻

九)の活躍にはじまる。いずれも室町時代から生きてきた人物で流儀書道を習いおさめて出世した。(寛永の三筆)室町時代からの戦国争乱の中にあつて、文教を保持してきたのは僧侶であつた。その中で禅僧は宋学などを日本に伝えて、新しい学問の先駆者となつた。隠元は明末の僧。江戸初期に帰化、わが黄檗宗の開祖となる。承応三年(一六五四)長崎に到着した。ただちに興福寺に入つたが、やがて四代将軍家綱に謁し、万治二年(一六五九)山城宇治に万福寺を開創した。隠元の来日は江戸時代の仏教界に多大の刺激を与えたが、とりわけ明風を伝えて江戸期唐様書道盛行の基礎を据えた。自ら書を能くし、後輩の木庵、即非とともに黄檗三筆といわれる。

北島雪山(一六三七―九八)江戸前期の唐様書家。医術を学ばんとする兄とともに長崎に出向き、折しも来朝中の独立どくりつから撥鐙法はつどうほうを、また愈立徳ゆりつとくから文徵明の筆法を授けられた。

後に江戸に出て書法を教授した。書名は次第に上がり、細井広沢ほそいこうたくに書法を伝えた。江戸唐様の祖としてわが書道史上、重きをなしている。



木庵筆



北島雪山筆 五言詩

細井広沢（二六五八―一七三五）北島雪山に書を学び、文徵明風を鼓吹し、著述や手本の刊行も多く、唐様書道の広宣流通に大功があった。書は各体をよくしたが特に行草に長じまた篆刻はか諸芸に通じていた。

寂巖（二七〇二―一七七二）良寛、明月と並び称せられる書僧。岡山の人、書かれる詩文語句は唐様が多く、自作の詩文を書くことは少なかつたという。書法を重視して王羲之の書を最も好んで研究した。

池大雅（一七二三―一七七六）京都の人、中国南宋画を体得し、同時に日本の伝統画や、西洋画の空間技法も吸収して次第に大雅独自の画境を築いた。四十九歳のとき与謝蕪村と「十便十宜帖」（川端康成記念館蔵）を描いた。書においても、江戸後期の唐様代表的書家として位置づけられる。さらに、篆刻家として知られる韓天寿（江戸中期の書家、画家、韓国余璋王の子孫と自称した）高芙蓉（篆刻に芸術性を回復させた。印聖と仰がれている）らとも親交を結び、富士山、立山、白山とともに登り「三岳者」と号したことは有名である。

良寛（一七五八―一八三二）禅僧、備中玉島円通寺に赴く、修行すること一〇年余、三三歳のとき、印可を付与された。諸国行脚の後郷里に帰ったのは、三八歳のころ。国上山の五合庵、麓の乙子神社内、そして晩年は鳥崎の木村元右衛門宅と



池大雅筆 一行

移り、ここに没した。寺を持たず、托鉢の日々、子供達と天真爛漫に遊ぶ良寛の逸話は、人口に膾炙かいしやしている。また多数の遺墨は、唐様全盛当時の遺品の中で時流を超越した光彩を放っている。自作の詩や和歌を書いたもの、あるいは手紙など、いずれも飄々とした筆致で脱俗の趣があり、見るものを魅了する。小野道風の「秋萩帖」懷素の「自叙帖」など、その基盤となったものが指摘されるが、すべて彼の血肉と化している。

市河米庵いちかわべいあん（安永八年—安政五年）儒者。宋の米芾の書をもっとも愛好したので米庵と号した。書は初め持明院家へ入門したが、次第に唐様書道に心が傾き、宋の米芾に私淑、のち長崎で清人胡兆新こちやうしんより書法を得、さらに晋唐明清の書を学んで、ついに唐様崇拜の理想を最終的に確立した。米庵・菱湖・菴翁は「幕末の三筆」といわれている。

良寛筆 七言絶句

梅花屢見筆如神
竹寧知更逼真百卉

市河米庵筆 七言絶句

菴翁そうおう1778—
1863
空海書法を習得し
た

春秋以爲千載文	此書論之芭蕉夫子	氏文章心非徒傳心	未論之鍾惺於文定	左傳非鮮明而作也	剗制左猶叙
---------	----------	----------	----------	----------	-------



趙子謙印

趙子謙印
二金
蝶堂



貫名^{ぬき}菰翁^{すおう}

(安永七年―文久三年) 徳島生まれ。号は海屋、海客、海叟、晩年は菰翁、十七歳のとき高野山に登り、空海の書を学んだ。三十四歳のとき京都に移った。京都で儒者として身を立て、また、詩人、南画家として有名になった。四十歳になってから書に努力するようになり、五十歳になってから、たびたび碑文を書くようになった。わが国の古代の名筆劇跡によつて書法を学ぶことを考えたのは菰翁だけである。江戸時代の書を学ぶ者はたいてい石刷手^{いしずりて}といわれた法帖を手本にしていた。それは刻のよくない法帖である。菰翁は精刻の法帖を選んで用いた。菰翁は鑑識に長じていた。江戸時代に菰翁のような人は珍しい。菰翁は拓本の精粗を鑑別することができたばかりでなく、法帖と拓本によつて晋唐の書法を学び、さらにわが国に伝えられている中国の古代の真跡、ならびにわが国の古代の書跡によつて古法を学ぶことに努めた。その高い識見は常人よりも数歩先んじていた。

明治の大家日下部鳴鶴は菰翁をもつとも尊重し、称揚するようになった。鳴鶴は、菰翁は三筆、三跡以後の「第一靈腕」といわなければならないといっている。

近代(明治元年―昭和二十年)

明治の初めまで江戸時代の唐様が流行していた。そして、江戸時代の末の巻菱湖^{まきりょうこ}や市河米庵などの書の流れを汲んだ書家がもてはやされた。したがつて明治の初めは江戸時代の延長であつたといわなければならない。

明治十三年(一八八〇)に清人揚守敬^{ようしゅけい}(一八三九―一九一五)が来朝した。揚守敬は藩存に南北朝時代の北朝の碑の書法を学んだ人である。一万数千点の拓本、法帖を持って来たといわれている。日下部鳴鶴^{くさかべめいかく}(一八三八―一九二二)、巖谷^{いわや}一六^{いちろうく}(一八三四―一九〇五)松田雪柯^{まつだせつか}(一八一九―八八)は揚守敬に北朝の碑の書法を学んだ。そして、旧様の唐様を捨てて、

新様の六朝風に転じた。揚守敬以外に六朝風を伝えたものがある。明治十年に渡支した北方心泉、明治十五年に渡支した中村梧竹、明治十九年に渡支した秋山白巖など中国で北碑の書法を学んで帰国した。

六朝風の書がさかんになると、画家の中村不折や俳人の河東碧梧桐（松山市出身、正岡子規の門、俳句革新運動にかかわった。子規没後、同門の高浜虚子と俳壇を二分し、新傾向運動を起こした。書において子規と親交深い中村不折の六朝書道研究に賛同し、前田黙鳳と不折がおこした健筆会に参加している）なども六朝風の書を書き、また前田黙鳳も斬釘截鉄のよ

池深香風露荷意淡
欲秋飲散衆宣息微
月生林隙

中村不折

日下部鳴鶴書

河流曲ニ轉十星還相喚
那比下江船揚帆忽不見

中村不折

官服人車
里桃柳

河東碧梧桐

うな六朝風の書を書いた。

江戸時代には法帖を手本にして文徵明・趙子昂の書法を学び、また、晋・唐の書法を学んでいた。しかし、明治になって拓本を手本にして北朝の碑の書法を学ぶようになってから、拓本を手本として用いるようになり、現在に至っている。

法帖は翻刻を重ねている。それゆえ、字形も点画も原本とはかなりことなる書になっている。しかし、拓本は原本と紙一重の差があるに過ぎないから、拓本を尊重するものは、拓本を手本にすべきであると主張した。

明治時代には書家でなくて書を巧妙に書くことができる者がいた。その数名を挙げる。

そえじまそうかい
副島蒼海（一八二八―一九〇五）佐賀県出身。政府の要職を歴任。外交史上に大きな功績を残した。漢字に精通し、詩をよくし、書は六朝風、氣力充実し、奔放にして豪壮、格調高く、その人となり が表われている。蒼海の書は現在でも清新である。

とみおかつさい
富岡鉄斎（一八三六―一九二四）年少より漢学、国学、陽明学、画を学んだ。神官となり神道復興に尽力した後、画業に専念した。潑刺とした筆致に深い味わいを示す画風を樹立した。書は鄭板橋（ていはんきやう中国清時代）を愛しながら独自の書風とな

富岡
鉄斎



っている。

犬養木堂（一八五五—一九三三）岡山県出身。昭和六年（一九三二）内閣総理大臣となり組閣し、満州進出後の外政、内政にあたった。翌年五月十五日、軍部の青年将校に射殺された。文章を能くし、また、書も古格をもつ中国書法に基づいた能書で、数多くの遺墨を残している。清の時代の北碑の研究家張裕釗の影響があるようである。

長尾雨山（一八六四—一九四二）高松出身。東大卒業、東京美術学校、東京高等師範学校教授を務めた。漢学者で、書を能くし、中国の書画や文房に造詣が深い。熊本の高教授時代には夏目漱石と親交があり、明治三六年渡支。大正八年に帰朝。著書に、「中国書画話」がある。

内藤湖南（一八六六—一九三四）秋田県出身朝日新聞社に入社、特に中国問題に健筆を揮う。明治三二年清国を遊歴。漢詩文をよくし、特に書は晋唐を基調とした典雅秀麗、近代の書史に光彩を放っている。

明治から対象にかけて第一の書家として尊重されたのは日下部鳴鶴である。鳴鶴は回腕法によって北碑の筆意で唐碑の書のような字形の矯正な書を書いた。門下から近藤雪竹・比田井天来らを出す。

（張裕釗夜坐詩）昭和二年作

飲酒思先先
幽居類子雲
深宵移燭
影獨去對爐
薰風起流螢

結 論（古代から考察して現在書道を考える）

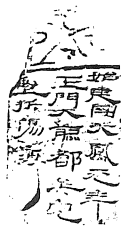
世の中がおちついて来ると、書もさかんになった。そして、現在はかつて見られなかったほどの盛況を呈^てしている。書を書く者の大部分は古典的な書を書いている。中国書道史でも、もっとも古い殷周の甲骨文も現在では専門的に研究するグループがあり、出版物も多い。展覧会でも多くはないが散見する。

冒頭に述べた、最も早く我が国に入ってきた証拠の漢字。つまり、志賀島の金印は、篆書で刻されている。その文字を見て、二〇〇〇年前とはいえ、古いという感じはしない。国宝に指定されたことは当然である。現代に生きているという言葉がそのまま肯定される。なおこの印に刻まれた文字によっても、我国にすでに文字を解するものがいたことがわかる。

古事記、日本書記によれば応神天皇の時代（四世紀―五世紀）に百済^{くだら}から王仁^{わに}が論語と千字文を我が国に伝えられたといわれる。



甲骨文



木簡

江田船山古墳で論議
九州歴史大学講座

9日 福岡でシンポ

銘文入りの鉄刀が出土、日本の古代史を考える上で重要な位置を占める江田船山古墳（熊本県・菊水町）に焦点を当てた九州歴史大学講座のシンポジウム「江田船山古墳に眠る火の国の王」が9日、福岡市中央区天神四丁目の都久志会館で開かれる。

同古墳の鉄刀は日本最古の金石文として戦前から注目を集めていたが、昭和五

十三年、稲荷山古墳（埼玉県）出土の鉄剣から銘文が発見され一躍、脚光を浴びた。双方の銘文に雄略天皇を指すとみられる大王名が記され、大和王権がすでに五世紀後半には関東から中

九州まで支配下においていたのではないかと、という統一支配時期とも絡む大きな問題を提起したからだ。

一方、江田船山古墳の副葬品には、中国製の銅鏡五面や朝鮮半島南部の伽耶地方から運ばれたとみられる金製耳飾り、金銅製香（くつ）、冠、須恵器などが含まれ、海を越えた活発な交流をつかがわせる。今回のシンポジウムでは、考古学と文献史学の両面から江田船山古墳を検証する。

日本で書かれた最古の漢字として登場するのは、江田船山古墳出土太刀銘である。文は漢字漢文であるが、これが現存する最古の日本で書かれた文字に位置し、その金属に刻まれた素朴な直線の交錯から、ようやく文明のきざしをうかがうことができよう。百済からやってきた東漢氏や西文氏^{やまとのあやうじ かわちのふみうじ}が、文筆をもつて大和朝廷に仕えたのもこのころで、まさに五世紀の前半にいたって、漢字や漢文が大和朝廷の帰属の生活に浸透しはじめたと思われる。

隅田八幡人物画像鏡銘は漢字で国語を表記した古いもので、かな沿革史のうえからも貴重な資料である。

法華義疏^{ほっけぎし}。聖徳太子の書かれたもので、もとは法隆寺にあったが、明治初年に皇室へ献納され今日に至っている。推古天皇（六一五年）のころの著作である。

人畜救済の大願をおこした元興寺の僧、道登が、激流宇治川に橋をかける工事を指揮していた。ようやく急流に橋は完成し、川の畔には小さな記念碑が立てられた。人の背丈ばかりの黒ずんだ石に、洗滌^{べいじ}タル横流、其ノ疾キコト^{はや}箭^やノ如シ……とはじまる碑文は、北魏の楷書風である。誰が筆を執ったか知らないが、力感をこめて鋭く書きつらぬかれたのである。この宇治橋碑は、もちろん日本に現存

江田船山古墳太刀銘



する最古の石刻文字である。

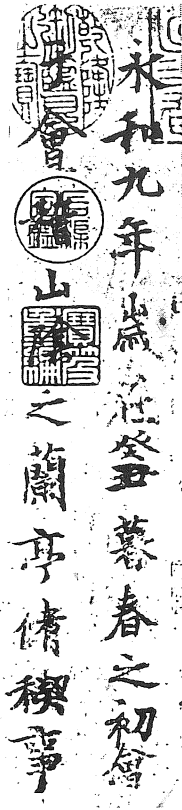
こうして聖徳太子の書といい、宇治橋の石碑といい、日本の書の開幕期にあたる書跡は、中国の書風をそのままに七世紀の前半を飾っているのである。

天武天皇十四年（六八六）書写と考定される金剛場陀羅尼経は欧陽詢欧陽通の筆意を完全にうけついでいる。わが国に現存する古写経のうち最古の遺品。筆者の宝林は布教のため渡来し、帰化した僧侶であろうと考えられている。

書法の印象からして、異彩を放つものとして多胡碑がある。この古風は、六朝の鄭道昭を思わせる。かつて宝暦年間（一七五一―一七六三）に拓本されて中国に渡り、彼の地で注目を集めたという。上代碑石の書の白眉であるといえる。昭和二十年の戦争のとき、村人たちはあわてて、傍の菜畑へこの碑を埋めかくしやがて世情おちつくころ、ふたたび元の姿に建てなおしたという。

王羲之・王献之の時代は日本の古墳期にあたる、中国では東晋である。

歴史の中で能書家は多いが、書聖の名を得たのは王羲之である。当時は、書体の変遷の中で篆隸から楷行草への移行期であった。江南に移住した貴族は、神仙のような高い境地を愛し、楷行草の三つの書体に美を凝らし芸術的に磨きかけた。



王羲之
蘭亭叙

取りかわされた尺牘（手紙）には、行書や草書、または行草を合わせた書体によって美しい文字が表現され、互いにその精絶さを称讃し合った。このようにして楷行草の美しさが完成の域に達したが、この偉大な事業を成し遂げた天才こそが王羲之である。その作品は多く現在に伝わるものが多く、学書者の中で課題となっている。特に、古来、傑作、神品と称され、書を学ぶ者は必ずと言ってよいほど習う蘭亭叙は高等学校の書道教科書に採用されている。その作品の楽毅論は光明皇后の臨書されたものがあり。光明皇后の楽毅論としても有名である。その他有名なものとして集字聖教序、十七帖、宣示表、墓田丙舍等おびただしい。その数一二〇帖ぐらいといわれる「羲之を攻めろ」というのはわが国の書道人の合言葉になっている。

空海は日本の書道家の頂点に立つ人。日本の王羲之ともいえるべき能書家として最も有名であり、詩人としても優れていた。聾瞽指帰は二十四歳の時の書で入唐以前の作。唐に留学中のノートともいえるべき三十帖冊子の空海の書写と思われる一部は王法の書法であり、日常の書写体である。自分の手控えて書かれたものであるから、作爲的なものではなく、あるがまま

空海

高益

空海

常持

顔真卿

高益

王羲之

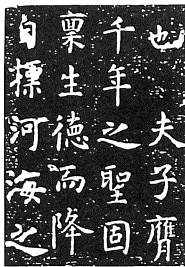
常持

の書体である。しかしながら草書の正体であり、それに書の生まれ方の意義があるように思われる。わが国の書道は後に和様に転じてゆくが、その根幹となるのは、草体であり日本における草体の基本とみることができる。

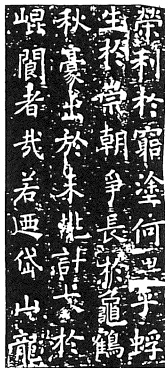
唐こそは、我が国に最も大きな影響を与えた王朝であった。殊に、書道における初唐は過去を集大成し将来への発展の大道を開いた貴重な時代であった。とは言っても唐王朝成立によって突如として書道の黄金時代が出現したのではない。二王の書を中心とし尺牘せきとくに拠った南方と、胡族こぞくの風の碑に拠る北方の二つの異なった書法の枠を統合した隋を忘れてはならない。幸か不幸か、隋の世は短く文化に力を尽くす時間的余裕がなく、その開花が唐に持ち越されたのである。初唐に活躍した三大家は隋の世を生きた人々であった。戦前から戦後の三年間、行われた文部省習字検定においては、唐の時代の特に欧陽詢、褚遂良を中心とする課題が出題され、受検者はこれの臨書に熱中したものであった。現在でも書を学ぶものは、まず唐のものからといわれている。虞世南の孔子廟堂碑は今日の整正な筆写体の規範といわれている。また殊に孫過庭そんかていの書譜は草書の手本として、先の王羲之の十七帖とともに草書手本の双壁といわれている。楷書を勉強するなら唐の作品、行書なら、王羲之の蘭亭叙、集字聖教序といわれている。



九成宮醴泉銘



孔子廟堂碑



孟法師碑

初唐

三大字

欧陽詢

虞世南

褚遂良

初唐の三大家として、虞世南、歐陽詢、褚遂良の三人をいい、後唐の顔真卿を加えて唐の四大家という。明治、大正から昭和の七、八年ごろまでの小学校の書き方の教科書を見ても、その字は、顔真卿の流れをくむ字であるように思われる。このように、わが国の書にも大きな影響を与えた。特に「顔真卿の三稿」が有名である。

顔真卿ほど書の上でりっぱな作品をたくさん残した人は、中国、日本を通じて他にない。

現在の書家でも、これを習う人は「顔法を習う」といい大変多い。その後、柳公権（七七八―八六五）は、顔真卿の書風を受け継いで、顔真卿の書によく似た字を書いたが、彼には及ばなかった。

わが国では、明治時代の人で軍人の神様といわれた乃木希典も、顔真卿風のりっぱな字を書いたといわれる。

宋の時代で、まず名をあげなければならないのは、蔡襄さいじょう・蘇軾そしき・黄庭堅こうていけん・米芾べいかつの四人であり、これを「宋の四大家」という。

現在中国法書選には、蘇軾・黄庭堅・米芾が出版されている。

現在の書道界では米芾が一番よく学習されていると思う。一社中で米芾を目標に習っているところもある。しかし、蘇そ

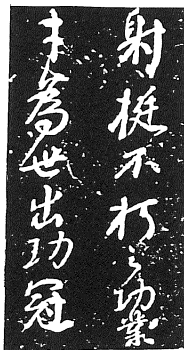


大正末期
の習字教
科書

毎
日
一
帖

（毎つねに、人心を慰（なぐさ）む）

争坐位帖顔真卿



軾・黄庭堅は特に詩文に秀れ、蘇軾は詩文において宋代第一に推された。黄庭堅は蘇軾に学んで詩文に長じていた。かれの作品「李太白仙詩卷」は大阪市美術館所蔵である。

この後、中国では、元、明、清と続いて中華民国となる。代表的な人物をあげると

元 趙子昂・鮮于樞

明 文徵明・祝允明・董其昌 王鐸 張瑞図

清 金農（金冬心） 鄧完白、趙子謙

である。

その中で特に、明の王鐸は戦後四十年程前から広く、深く研究され、また展覧会においても王鐸の調子と思われるものが多い。殊に王鐸はその作品の中で二王のものを多く臨書したものが多いせいか、行草作品を書こうとするものはこの王鐸研究に没頭する。出版物も大変多い。書道の社中においては、唐以前の古典を研究するグループと、宋・明・清を主として研究するグループがある。展覧会作品傾向は大体行草の作品が八割ぐらいで、後は、隸書、篆書と楷書は非常に少ない。その八割が全部明、清のものかというところではない。前漢以前の作品傾向のものも見られる。

書 醉翁亭記
明 環滁皆山也其西南諸峰林
徵 者壘泉也峰回路轉有亭翼
文 來飲於此飲少輒醉而年又
酒也若夫日出而林霏開雲

點、梅前細面香江平水
今日海濱有浦 蒼浪黃花
扶筇系心看菜葉俯仰人
客有同予遊西山々々紀
董其昌書

中国の能書として頂点に立つ能書家といえ、後漢の鍾繇・王羲之、献之、初唐、中唐の四大家、宋の四大家、元以後の趙孟頫、王鐸、金農、鄧石如、何紹基、中華民國の吳昌碩等、これらの能書家は中国書道史に貢献したばかりか、わが国の能書家に多大の影響を与えている。わが国の能書家はこれらの中国能書家の研究にまた中国古代からの作品研究に精進し、そのために、いろいろの研究組織を作ったり、中国に留学研究のためたびたび訪中し、その成果を充分に挙げている。つまり殷の時代から中華民國に至るまで、書道史上においては、ほとんど、基として中国の古典を研究されているといわなければならない。書法を学ぶ者は漢字の書もかなの書も古典を規範としている。それゆえ、古来の書法によつて書を書き、

荆川 鄭西橋 滿東 蕭何 枝密 山翁
 楊叔 韓華 韓回 雲南 陰谷 區景 趙希 黎澹
 須高 多事 清風 別自 註 在 碩修 歸 故園 王鐸書

形

手島右卿書

古典的な書を書いてゐる。行書、草書を書く者がもっとも多いが、楷書を書くものもある。また、篆書、隸書を書く者もある。篆書を書くものは周、秦の書を規範とし、隸書を書く者は漢の書を規範とし、楷書、行書、草書を書く者は晋、唐の書を規範としている。また明、清の行書、草書を規範としている者もある。かなの書はたいいていの人が藤原時代の古筆を規範としている。

平成四年五月に韓国ソウルにおいて、中国、日本、台湾、香港、マレーシア、シンガポール、アメリカ、韓国の八か国の参加からなる現代書道展がおこなわれた。そこで見えることは、もはや、書道は一漢字文化圏だけの閉ざされた芸術ではないということである。

一、六〇〇万人の書道愛好者がいるといわれているが、一国一社中のお家流的書風の隅の中に去留きりゆうしている場合ではないと思われる。

現代作家作品

草庵雪夜 村上三島

草庵雪夜

草庵雪夜

草庵雪夜

草庵雪夜

草庵雪夜

毛沢東の句 今井凌雪

星 弘 道

曾鞏詩

現代作家作品

古の山を
白雲の山
杉岡華邨

白雲の山 杉岡華邨

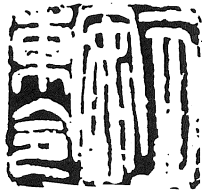
月夜
山
西川寧書

西川寧書



以同道為用 豐散山

吳昌碩
一月安
東令



参 考 資 料

春名好重著

日本の能書

中国の能書

中国の書の歴史

日本書道辞典小松茂美

中国書道辞典中西慶爾

和漢書道史加藤達成

和漢書道史藤原鶴来

書の歴史 伏見冲敏

書の歴史 榊 莫山

字の歴史 江宋賢治

書道の歴史 堀江知彦

日本の書道 後村亘園

中国法書選